イメージ次第で魔法が使えるなら、忍術（のマネ）もできるよな！？

一日の睡眠時間は10時間

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「魔法はイメージが固まることで発動、ならＮＡＲＵＴＯの影分身とか螺旋丸とかもできるよな!?」

そんな考えでアールスハイド王国に転生した者。その者、のちに「賢者の孫」と並ぶ相棒になる・・・！

「賢者の孫」アニメ化おめでとう！

この小説はなろうからのファンだった主が妄想していたものを書いたものです。

なるべく原作路線で進めますが、主人公は最強にしていくので強キャラが瞬殺されちゃって面白くない感じになってしまったら申し訳ありません。

※現在無期限の更新停止中です、申し訳ありません。

目次

初めての投稿は、やっぱり設定からだよネ！ —— 1

序章　―１ｓｔ　ＳＴＡＧＥ―

其の一　俺、仙人になるってばよ！ —— 4

其の二　俺、修行するってばよ！ —— 13

其の三　俺、ひと狩りするってばよ！ —— 18

其の四　俺、妹に会うってばよ！ —— 27

其の五　俺、１５歳になったってばよ！ —— 40

ここで息抜き　キャラ紹介 —— 46

1章　―２ｎｄ　ＳＴＡＧＥ―

其の六　俺、早速会ってみたってばよ！ —— 49

其の七　俺、力を示してみたってばよ！ —— 56

其の八　俺、色々聞くってばよ！ —— 63

初めての投稿は、やっぱり設定からだよネ！

主人公の設定

名前　■■■　■■■　↓　マルト＝リグ・ヴェーダ

ＣＶ．河西健吾（三日月・オーガスなどを担当）

種族　人間　↓　六道仙人（自称）　↓　人間（仙人）

出身国　●●●　↓　アールスハイド王国辺境

使える術　（魔法）　忍術、体術、幻術、封印術、呪印術、秘術、仙術

血継限界、淘汰、網羅　（魔法）　写輪眼、万華鏡写輪眼（永遠含む）、輪廻眼、輪廻写輪眼、白眼、転生眼、浄眼、全性質変化（木遁など）

モード（魔法）　仙人モード、尾獣チャクラモード、尾獣モード、六道仙人モード、チャクラモード（本編オリジナル）

武器　手裏剣、クナイ、飛雷神クナイ、千本、巻物、札、刀、霧隠れ忍刀七本、求道玉、ぬのぼこの剣、六道仙人の宝具

その他解説

本作主人公にして熱狂的なＮＡＲＵＴＯファン。厨二病時代は豪火球の術を練習していた経験がある。

とある経緯から転生のチャンスを得て、ＮＡＲＵＴＯの連載が終わった後にハマった「賢者の孫」に転生を希望する。ただ、向こうの世界で「忍術だ（キリッ」なんて言ったらイタい子に見られてしまうことを考え原作の数百年前に転生し、忍術の文化を築いてから再度転生する計画をたてて転生した。最初の転生で「大筒木一族」に近い部族を立ち上げ、自らも輪廻眼の開眼や忍術の開発を達成、部族内外の人間に「六道仙人」を自称してＮＡＲＵＴＯの文化を根付かせてフェードアウト、再転生でシン・ウォルフォードと同い年の少年として生活する。最初の転生で「無尽蔵の魔力」「血継限界、淘汰を全て使える肉体」「ＮＡＲＵＴＯ世界の特殊な武器」「二回目の転生に最初の転生時のステータスを持っていく権利」を獲得し、２回目の転生はのっけから最強レベル。

見た目に関しては、最初の転生は一般人の時のままで転生して（知

り合いから大筒木アシュラに似ていると言われたらしい）、二回目は［Ｆａｔｅ／］シリーズのカルナを体つきを良くしたイメージ。

性格は温厚、しかしキレると万華鏡開眼時のサスケ（つまり闇堕ち）みたいになる。好みの女性は「自分の身は相手を打ちのめすことで守る」タイプ。守るより、肩を並べて戦ってくれる人のほうが好意を持つ。

魔法のレベルは無詠唱どころかノーモーションで範囲攻撃ができる。が、本人は印を組んで術を発動させたいためしない。つまり常時舐めプしている。

能力についてはすべてオンオフの切り替えが可能。写輪眼と輪廻眼の切り替えもでき、万華鏡時の瞳術は選択可能、須佐能乎はサイズ、形態調節できる。浄眼は［異空間収納］の魔法が使える人物を対象に、その異空間を透視できる仕様になっている。

仙人モードは妙木山、龍池洞、湿骨林の全モードになれる。妙木山式の場合はナルトの隈取りで髪の色が薄黄緑色になる。龍池洞式の場合はカブトの隈取りで髪が金色になる。湿骨林式の場合は千手柱間の隈取りになり、髪色は変わらず水気を帯びる。

尾獣チャクラ、尾獣モードは無限の魔力でゴリ押ししてなる再現技。ようは見た目のみのモードであり、尾獣たちは一切関係ない。

もちろん十尾の人柱力ではないため六道仙人というのは嘘になるが、それでもただの仙人よりも強い（と思っている）六道仙人を名乗り続けたのは内緒。

六道仙人モードは最初の転生時の全盛期（大筒木ハゴロモの衣装になる）の姿になるタイプと、ナルト（アシュラ）とサスケ（インドラ）のように分けるタイプの２種類がある。

チャクラモードとは四代目雷影などが使用したチャクラの性質変化による活性化と同じで、それぞれの性質変化に応じた変化を持つ。（詳細は本編にて紹介）

戦闘能力は近接格闘よりのオールラウンダー。自分は仙術、他人は医療忍術で完治させることができるため援護役としても働ける。さらに言えば影分身で偵察役、飛雷神の術で伝達役にもなれる。もはや

隙が無い、皆無である。
忍術は火遁と雷遁と土遁を主にして扱う。２回の転生で悪人や罪人に対する割り切りもできているため、情報を引き出すためなら月読による拷問・・・もとい尋問（イタチがカカシにしたやつ）も辞さない。
しかし、見た目の不気味さと決行の早さから敵に対して非情になる人間だと思われがちなのがコンプレックスで、やりすぎると周りをドン引かせ、挙句の果てに泣かしてしまうことに悩んでいる。
ついた呼び名が「古代の賢者」「現代の仙人」「自重しないやつ二号」

おまけ
主人公の最初に転生した影響で一部の血継限界が継承されている。なので「賢者の孫」側の人物のステータスが変化する可能性がある。

序章　―１ｓｔ　ＳＴＡＧＥ―

其の一　俺、仙人になるってばよ！

「え、転生？」
「はい、大変申し訳なく。また、どうしても受け入れられないと存じますが・・・」
　とある都市の、とある往来。
　時刻は午後４時と、人によっては帰路の途にいるであろうそこで、一人の男性と［誰か］が向かい合って何かを話している。
　いや、話をしている［誰か］の方は、常軌を逸した、と言うよりか誰が見ても非常識な見た目をしていた。服装は純白の布を一枚、肩掛けや腰結びで辛うじて隠れている程度、頭上から日光の様な光が降り、体からはまるで光の粒子が零れ落ちているようにも見える。そして何より、発せられた言葉が普通に考えずとも出てくるわけがないセリフであったことからも、この者の異常さが窺える。
「受け入れられないっていうか、え？　なんか時間が止まってない？」
「あ、はい。通常我々が現世に降り立つと、信仰心のある人間の場合は騒ぎになってしまうので、少々時間の進行を止めてもらっています」
「はー、やっぱやることのスケールが違うなぁ。え、でもなんで俺に話しかけたんだ？」
「それが時間停止をしてもらった理由なのですが、なんでも我々の上にあたる存在が最近の異世界転生ストーリーの創作物をえらく気に入りまして・・・」
「それで、俺みたいな一般人に異世界に転生してもらうために来た、と」
「はい」
　その答えを聞いたもう男性の方は合点がいったと頷く。男性の特徴を挙げると短髪で少し三白眼に見られる顔つきに、暗緑色のスーツとコートを着ている。これだけである。
（なんか貶された気が・・・）「異世界転生か、確かに俺も電車の中で

読んでるけど。質問だけど、転生する先はそっちで決まってたりするのか？」
「いいえ。上の存在からは現世の人間を別世界に転生せよ、としか」
「適当だなー。じゃあ、転生するときになにか能力とかもらえたりするのか？」
「能力についてですか？　少々お待ちください・・・回答がきました。好きにせよ、と」
「ホントに大丈夫かお前らの上って？」
「我々からは認識することすらできない存在ですから、なんとも・・・」
　なんてことを少々話して、二人は改めて本題を進める。
「それでですが、ぜひ転生していただけないかと」
「んまあ転生は受けるけど、なんで俺なんだ？」
「それはですね、上の存在と貴男（あなた）が見ているインターネットサイトが同じで、なおかつ同じ作品のフォローをされているとかで」
「まじかよ!?」
　驚愕の事実にスーツの男性は顔を引きつらせてしまう。まさか自分と相手の上の存在が同じ趣味を持っていたなんて・・・。
「特にお好きでしたのが、【賢者の孫】だそうです」
「ああ、あの作品は俺も好きだよ。新しい話が出た瞬間にすぐ読んじゃうよ」
「上の存在もそちらに転生するのでしたら特に優遇せよ、という通達も来ています」
「ふーん」
　その言葉を聞いた男性は考えていたことを相手に切り出す。
「ならさ、二回転生するってのはアリ？」
「死後の復活ですか？　であればそれを能力として付与しますが」
「いやいや、ちょっとやりたいことがあるんだよ」
「えっと・・・？」
「いや、俺って【賢者の孫】みたいな無双物語も好きだけどそれを知る前に【ＮＡＲＵＴＯ】がめっちゃ好きだったんだよ。でもＮＡＲＵＴＯの世界って人が簡単に死ぬからできれば別の世界でＮＡＲＵＴＯ

の忍術とかを使ってみたいなって。でも原作の時間じゃ忍術なんて使ったら変に目立つだろ？　だから先に転生して忍術の痕跡を遺してれば目立つこともないんじゃないかって思ってさ」
「ああ、なるほど。つまり原作の始まる前に一度転生してから、原作の時間にまた転生したい、そういうことですね？　それでしたら問題はありませんよ」
「よっしゃ。じゃあ最初の転生は原作の始まる前、できたらアールスハイド王国ができたときより前の時代に転生してくれ」
「わかりました。ではほかの能力に何かご要望はありますか？」
「じゃあ・・・」
　そうして、着々と転生に向けた準備をすすめていく男性ともう一人。
「こんなもんでいいか」
「ええ。これ以上行くとさすがに上の存在からも止められそうです・・・」
　二人が話し合った結果として、
・無尽蔵の魔力（最初と二度目の転生先に適用）
・【ＮＡＲＵＴＯ】の血継限界と血継淘汰を全て扱える肉体
・【ＮＡＲＵＴＯ】の忍具全種類（任務服含む）
・次に転生するとき、前の体の状態を引き継ぐ
　を、もらえることとなった。
「いやーありがとうな！　ここまで許してもらえるなんて！」
「ええ。貴男が教えてくださった創作物を中心とした要求でしたから探すのは楽でしたが、これは流石におかしいと思えますよ。何ですか山をも超える背丈の巨人とか隕石を落とす魔眼って。こんなのは英雄の時代でもいませんでしたよ」
「だから創作で作るんだよ、超常の存在なんて所詮は二次元の話なのさ」
「正論ありがとうございます。それでは転生しますが何か忘れたこと等はありますか？」
「ああ・・・じゃあこの世界の親と親友に最期の言葉でも送りたいな」

「承知しました。内容はどのように？」
「ん～、無難にありがとう、さようなら、かな？」
「・・・録音しました。これは貴男が行った後に幻聴のような具合で聞かせます」
「サンキュー♪　んじゃ頼むわ」
「はい。では僭越ですが私から、貴男の来世が幸福に満ちたものであることを祈ります」
　スーツを着た男性は、自分の足元からまばゆい光が出始めた頃に[誰か]の祝福の言葉を聞いて、顔に笑みを浮かべた。そしてその男性にこう返す。
「おう！　お前も上の存在も、こんなチャンスをくれてありがとうな！　今度また会ったら酒でも呑んで語り合おうぜ！」
　その言葉を最後に、スーツの男性の姿は消え、周りの時間が進み始めた。
　と、同時に近くの交差点から大きな衝突音と誰かの悲鳴が響き渡る。
　その日、転生したその男性がトラックとの衝突事故で出血多量により亡くなるというニュースが流れることとなった。

～アールスハイド王国建国までの歴史書　秘匿された断片　【仙人

の里】と【六道仙人】～

アールスハイド王国が建国されるまで、その地は【仙人の里】と呼ばれ、【仙人の一族】という者達が暮らしていたと伝えられている。

一族は元々、場所が近い数個ほどの村の民であったが、ある一人の男がその村々をまとめあげ一つの【里】にしたという。

その男、【六道仙人】と名乗り不可思議な術を操ったそうな。その瞳は波紋のような模様を帯びており悠久の時を生きたかのようなさざ波のごとき気配をしていた。

そして仙人様には不思議と人と人をつなぎ合わせる力があり、初めは彼の言葉に耳を貸さなかった民も、仙人の真摯な構えと民への無償の献身に惹かれて【里】の話を受けたそうな。

そして彼の望む理想郷、老若男女が等しく手を握り合う【里】が完成し、仙人様の術を両手で形作る【印】と己の肉体と精神によって作り出される【力（チカラ）】で模倣した新たな術・・・【忍術】によって、土地は潤い、人々に笑顔を齎した。

しかし時の流れというのは酷く、愛する家族ともいうべき【里】の民と仙人様の教えを享受しに来た無数の人々に見守れながら、【六道仙人】は静かに息を引き取った。

そのあと、【里】は滅亡への一途をたどっていった。

【六道仙人】は女と契りを結ばずその生涯を【里】に費やした。そしてその【里】は多数の村の民でできたもの、その価値観、村民への取り締まりといったものの全てが異なり、尚且つ仙人様の後の【里】の長には村中で最も力ある者へ任せるといった風潮が流れてしまい、【里】の中は人々の笑みと幸福に満ちた桃源郷から、血と死臭に満ちた地獄

へと変わった。

後継者候補たちによる計略、潰し合い、小規模な戦闘。挙句の果てには民の生活の為にと仙人様が伝えた忍術も戦いの道具にされ、周辺の村々も巻き込んだ戦争へと激化した。

そんなことが後継者を決めるたびに起きたとなると結果は一目瞭然。

土地を潤すための忍術は使える人間が次々に死んだために荒れ果て、【里】の跡地には大量の血が染み込み例え雨が降ろうと流れない赤い大地が拡がるだけとなってしまった。

人間など一人もおらず、ただ死肉を喰らう獣しかいなくなった【仙人の里】と、【六道仙人】の伝説は、最早二度と戻らぬ幻として後の世にお伽草子として語られることとなった。

このような話から、数百年後の我が国の初代国王は、【里】跡地にて建国の際、

「民は全て王の守護下にある」
「民のすべては等しく、他者の尊厳を傷つける行為を許さぬ」
「国の王は王家が人々の賛成と厳正な判断で後継者を決める」

という旨を宣言し、民がそれに賛同した経緯を持つ。

【里】が齎した栄華と悲劇の一幕は、その上に建てられた王国への正しい教えをもたらしたと言えるであろう。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

その後のページは掠れて読めなくなっていた。

「お、久しぶり！　また会えたな」
「ええ、姿は以前の時よりもたくましくなられましたね」
「ああ。あの時代は今みたいに娯楽がなかったからな。ずっと術作ったり体を鍛えたりしてばっかだったからな」
「確かに言えてますね。それでは再転生を行いますか？」
「おいおい。最初の時に言ったろ。次に会ったときは酒でも呑もうぜって。だから俺の【里】で作った中で一番うまかった一本を持ってきたってのによ！」
「え、いや私たちはそういった俗世のものは摂取してはいけないと」
「いいじゃねえか！　堅苦しいのは抜き、やっと面倒な下準備が終わったんだ呑むぞというか呑む！」
「はあ・・・では一杯だけですよ？」
「お！　やっぱノリが良くなったなお前！」
「あれから下界の創作物を窺うようになりまして。やはり人間の考え

て作り出したものは素晴らしいの一言に尽きます」
「お？　じゃあお前のお気に入りってどんなのだよ？」
「私が特に興味を持ったのは、そうですね・・・」

「あー、結局、つまみ無しで呑んじまった。これに合うやつ、レシピは覚えてるんだけどな～」
「私はこれだけでも大変良かったですよ？」
「へへっ、そうか？」
「ええ」
「・・・・・・・・・さてと、そろそろ時間か？」
「再転生の、ですか？」
「ああ。約束も守ったし、もう思い残すことはねえよ」
「では、今度は「賢者の孫」、その本編の時代への転生を始めます」
「本音を言やぁ、今度はお前とも一緒に行きてぇな」
「・・・・・・・・・・・・それは、無理な話です」
「ちょっと考えただろ？」
「さて、何の事やら」
「・・・・・なあ、別に好きにしていいってのは、俺とお前のことだったんじゃねえか？」
「・・・？」
「お前の上の存在がどんな奴かなんて俺が知るわけないんだが、それでもここまで自由にさせてくれるあたり、そんな気がするんだよな俺は」

「・・・・・・でしたら」
「ん？」
「貴男と同じ世界に行って、貴男ともう一度会ったとき、私の姿形が異なっていたとしても、見つけてくれますか？」
「んなの当たり前だろ」
「！　即答・・・・・・ですか」
「つーか、俺は元々一般人だが今は立派な六道仙人（自称）だぞ？　お前の気配くらいすぐに感知して忍術使って行ってやる！　それが次の約束だ！」
「フフフ、それじゃあその約束、破ったら許しませんよ？」
「おう！　俺の座右の銘は「まっすぐ自分の言った言葉は曲げない」だ！　ぜってー会いに行くからな！」
「はい。では同じことですが、貴男の来世が幸福に満ちたものであることを祈っています、これからも」
「んじゃ俺はお前と一緒に世界を見れることを祈っているぜ！」
「・・・・・・〝また〟、会いましょうね？」
「へへ！　〝また〟、な！」

其の二　俺、修行するってばよ！

「賢者の孫」基準　シン・ウォルフォードが８歳の時

アールスハイド王国辺境、「フェイ」
ここは広さで言えば中規模程度、特定の領主がおらず昔ながらの[村長]が治めるこの村で、それはそれは大きな少年の声が響き渡る。
「ふぅっ！」
「まだまだ甘いぞ、息子！」
声の出所を探した先には、輝きの少ない銀と黒色が入った髪の男と、日に照らされて純白に輝く髪の毛の少年が一騎打ちをしていた。しかし、使っているのは各々の得物に近い形状の木の棒ではあったが。
「だったら・・・！」
「む!?　フム、最早魔法の腕は俺の手に負えなくなったか」
少年が棒を打ち合った時の密着状態で空いた手の平を男に向けると、そこから炎が噴き出して男を焼こうと迸る。
先に解説すると少年が放ったのは「魔法」と呼ばれ、人によっては詠唱を詠んで発動させる者もいるが、この少年はそれを破棄した「無詠唱」と言う一段階上の手法で発動させているのだ。
その魔法だが、男はそれを難なく避けてしまう。
「だが発動の直後はすぐに動けないようだな！」
「しまっ・・・！」
男は避けた体勢から反転、常人では目で追いつけない速度で少年を翻弄し！
「はあぁ！」
「ぐあぁっ・・・！」
咄嗟に出した腕の防御を貫通する威力で男の振り下ろしを受けて、少年は足元の地面へと投げ出される形で倒れた。
男は棒を振り下ろした状態から緩く体勢を戻し、体の力を抜く。そして、

「む、しまった・・・。これではあいつに怒られる・・・・・・」
　地面に倒れてそのまま気絶してしまった少年に気づき、先ほどまでとは打って変わって面倒くさそうな表情で空を見上げるのであった・・・。

・・・・・・少年＆男　移動中・・・・・・・

「こんのオバカ！　あれだけやり過ぎるなって言ったのに、また性懲りもなく！」
「・・・・・・はい、すいません」
「あー、はは・・・」（これはまた、長くなりそう）
　場所が変わって一軒の民家。そこでは今度、薄紫色の髪をした女性の怒声と男性の気落ちした返事、それと先ほど気絶していた少年の声が聞こえていた。
「だからまだ早すぎるって言ったのよ、そもそもこの子はまだ８歳なのよ？　まだ年が二桁にもいかない子どもの内から体を動かし過ぎて、大きくなったときに傷が残ったらどうしてくれるのかしら!?」
「そ、そのときはお前の回復魔法で・・・・・・」
「魔法なんて身体強化さえできてればいい」なんて言ってこの前黒こげになった人、正直に手、上げてくれるかしら？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・ハイ」
「あっれー？　魔法どころか魔道具すら信じなくてお風呂も沸かせず、泣く泣く雪の降る季節に私に頼み込んできたのはどこの誰だったかしらー？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ハイ、ワタシデス」
「そんなアナタが回復魔法を頼る!?　はーこれはこれは、明日は雷の槍でも降ってくるのかしら？　アンタの頭上にでも！」
「・・・・・・・・・・・・（灰化）」
「か、〝母さん〟？　俺も特に痕とか残らなかったんだし、もうその辺

でやめて魔法を教えてよ？」
　女性が男性に的確なお叱りと男性が過去にやらかした事をネタに傷を抉り続けて既に１０分以上経ち、流石に聞いてられないと少年は男・・・少年の父親を庇う具合に、女性・・・少年の母親に魔法の修行をせがむ。
「あら、もうそんな時間？　まあいいわ、じゃあアンタはそこで魔道具に使う魔力でも溜めてなさい！　いい!?　少しでも動いたら下半身凍らせて固定するから！」
「ワカリマシタ、ドウゾ、ゴユックリ」
「あはは・・・」（父さん、ドンマイ！）

・・・・・・少年＆母　移動中・・・・・・

「まったくあの人と来たら！」
「まあ、〝父さん〟も俺もあの時は夢中だったから」
「それでも限度っていうのがあるわよ。もう痛いところはないわね？」
「うん、平気。でも魔法って凄いよね、痕がもう残ってない」
「あったりまえよ！　世界広しと言えど全系統使いであるアタシに敵う人なんて・・・・・・まあ、賢者様は別として、いない、と思う」
「母さん・・・」
　怒り心頭で少年の傷を魔法で回復させている少年の母親の自慢話を簡単に聞きながら、少年は改めて母親の正面に座り直し、机の上に置かれた分厚い書物・・・「魔法の教本」を開く。
「えっとそれで、今日はどこからだったかしら？」
「「魔力の基礎向上に関する訓練法の導出」の章からだよ」
「ありがと。それじゃー解説するけど、魔力に関係する用語として「魔力量」「魔力制御」「魔力消費量」などがあってその殆どは増減の関係にあるわ」

「「魔力量」が多いと魔法の威力や性能は上がるけど、その分だけ「魔力制御」と「魔力消費量」に負担がかかる、だっけ？」
「正解♪　正確に言えば、高等魔法であればあるほど使い手の「魔力量」と「魔力制御」「魔力消費量」が増大する、って言った方が正しいわ」
　教本の内容と照らし合わせて、少年は母親の解説と自分の解答を記録用の羊皮紙に書いていく。
「それで、その「魔力」を全般的に捉えてその基礎向上を目的とした場合、どんなことが考えられる？」
「うーん、素直に考えると魔力を全消費して空っぽの状態にまでしてから、集中して魔力をかき集める、とか？」
「それも一つの手ね。無意識に満タンだって思っている時より、集中して限界まで詰め込んだ時の方が魔力量は増えるわ」
「でもそれは一時的なものでしかなくて、もっと別な方法があるんだよね」
「ええ。正解は「小さな炎を魔法で長時間出し続けている」ことよ」
「あ、そっか。炎を燃やすための「魔力」を集めながら、小さく燃やすために「制御」して、なるべく長い時間保つためにも、「消費量」を減らすことを考えられるのか」
「そう！　一般的に言われる魔法使いのレベルだと、
　見習いは最大で３時間、
　一人前は９時間、
　宮廷魔道士は１５時間、
　かの有名な「賢者」様は１日中火をつけていられるそうよ！」
「へ～」
　母親が興奮した様子で先ほどから幾度か言っている「賢者」の言葉に、少年はこれといって変化はなく、ただ淡々と紙に文字を書き連ねていた。それを見た母親は少し面白くないという風に少年に話す。
「もう何よ？　それだけ賢者様はすごいんだって言ってるのに～」
「だって、今は隠居しちゃってどこにいるかわからない有名人より、俺の前で実際に見せてくれる父さんや母さんのほうが凄いって思うし、

俺は母さんのこと、この世界で一番魔法をうまく扱えてるって思うから」
「も、もう！　そんな調子の良い事言っちゃって！　いいわ、そんなこと言ってくれる息子には私の知る限りの魔法を教えてあげるわ！　いい？　今よりビシバシ鍛えるんだからね!?」
「お、お手柔らかにお願いします、お母様・・・」
　息子からの賞賛の言葉に気をよくした母親は、今以上の魔法の訓練を息子にすることを決意し、少年はあまり辛くない内容になっていることを願うのであった。
　そしてその後、夕飯の時間まで母親と魔法の勉強をした少年は、父親も含めた3人で夕飯を取り、自室のベッドに転がり込んで今日のことを振り返る。
（結局、あの後は小さい炎の持続耐久を3時間超えるまでやらされたなー。父さんの組手ももう少しで一撃入れられそうだけどまだ本気出してなさそうなんだよなアレ。
　でも魔力量も増えてきたし、体力も増えてきた。この調子なら〝あれ〟を・・・・・・〝忍術〟が使えるかもしれない）
「よし、とにかく明日だ、今日はもう寝る！」
　そう締めくくった少年は布団をかぶり目を閉じる。数刻ののち、そこからは寝息が聞こえるだけになっていた。
　この少年の名は【マルト＝リグ・ヴェーダ】
　前世では【六道仙人】という名であった【里】創立の立役者にして、この世界に転生してきたスーツの男の、今の姿である。

其の三　俺、ひと狩りするってばよ！

「賢者の孫」基準　シン・ウォルフォードが１０歳のとき

「マルトー！　ちょっと山から山菜とお魚獲ってきてくれないかしら？」
「わかったー、父さんは？」
「村の人たちの畑の手伝いに行ってるわ。はいカゴ」
「ありがと。そう言えば、二つ隣の家で熱出した子がいるみたいだから、ついでに薬草も取ってくるよ」
「そうね、通り道だし山菜も一緒に渡してあげたらどう？」
「うん、そうするよ。それじゃ、行ってきます！」
「ほんと、マルトはいい子ね。あの人の子どもって思えないくらいに♪」
（母さんがそれを言っちゃったら、父さん立つ瀬がないと思うんだけど）

・・・・・・　少年　移動中　・・・・・・

この「フェイ」の村は近くに水源がある山があって、気候の穏やかさから、山菜や魚、それを食べにくる鳥や猪が豊富に生息している。そして俺たち村の人々はそれらの食材を自分たちで狩って食べている。さらに食べられない動物の内臓を山の奥地に埋めておくと植物や地中に住む虫たちの働きで自然と肥料になって山が成長する。この自然のサイクルはずっと昔から続いてて村の男の子は狩りから山へ還すまでの工程をできて初めて一人前だと言われている。
と、自己紹介が遅れたな。俺の名前は【マルト・リグ＝ヴェーダ】だ。両親や村の人からは【マール】って呼ばれてることもある。多分知ってるだろうけど、俺はこの世界には２回ほど転生をした異世界の一般

人だった。
　異世界転生を知っていた俺からしたらＮＡＲＵＴＯで使われる忍術・・・【螺旋丸】や【千鳥】を自分でやってみたいとも思っていて、でもあの原作の世界は下手しなくても戦争であっという間に死んじゃいそうだから行きたくはなかった。けどこの「賢者の孫」なら安全に忍術（のマネ）が使えると思って、〝あいつ〟に能力や武器をもらって転生した。今の家族は父さんと母さんと俺の３人家族。父さんの名前は【バルド＝リグ・ヴェーダ】、俺の剣術の先生でちょっとだけ口数が少なくて、母さんの名前は【レイナ＝リグ・ヴェーダ】、俺の魔法の先生で活発な性格をしている。
「うし、ここらへんでいいかな」
　最初の目的だった山菜と薬草が良く生える場所まで来た俺は、背負っていたカゴを下して身軽になる。そんでもって急激に運動をして筋肉を傷めないように軽く伸びや柔軟体操をする。
（周囲に人の気配は・・・・・・ないな。ついでに魔力感知も・・・これも特に反応なし）
「そんじゃさっさと集めようか、【影分身の術】！」
　ドンドンドンドン!!
　両手の人差し指と中指をそろえて十字の印を組んで術を発動させる。そうすると俺の周囲に同じ姿をした俺が４人増える。
　今日の記念すべき最初の忍術は、【影分身の術】だ。
「じゃあ分身ＡとＢは山菜、ＣとＤは薬草を探してくれ」
「「「「応！」」」」
「本体の俺は、ここで【仙術】の修行をするか」
　分身たちに仕事を言い伝えてから、俺はそばにあった大きめの石の上で座禅を組んで集中する。そうして、【自然エネルギー】を自分の体に集めていく。【仙術】はＮＡＲＵＴＯの世界にある特殊な術のことで、簡単に言えば自然界の力と己の力を混ぜ合わせてより強いエネルギーを作り出す術だ。転生のし直しで能力を使わなくて鈍ってしまった感覚を取り戻す目的で、こうして１人で修行を積んでるってわけだ。ちなみにチャクラ・・ここは【魔力】って言った方がいいか・・

コントロールのほうは問題なくできている。垂直登りも水上歩行も余裕だ。仙術の修行に戻ると、今は集まった自然エネルギーと自分の中にある魔力を練りこませる工程に入りつつある。結果、今日はうまい具合に【仙術エネルギー】が出来上がった。ここで上手くいかないと蝦蟇や蛇や蛞蝓に変身して、最後には石像になるから焦るけど、今日は無事にいけて安心したぜ。
「「「おーいオリジナルー、こっちの仕事終わったぜ」」」
「おー、お疲れ分身たち。ところでさ、今仙術チャクラ（もどき）が作れたんだけど俺仙人モードになってる!?」
「え？　あー、なってるぞ、半分だけ」→A
「本当だ、片方が蝦蟇で片方が蛇になってる」→B
「目の隈取りも、左右で違うし」→C
「髪の毛、なんか湿ってる・・・じゃないな、水気がまとわりついてる感じだな」→D
「え、マジで？」→オリジナルって言うか俺
　分身の言葉を聞いて確かめるために水遁で地面に水溜まりを作って顔を見ると、自分から見て左側は【うずまきナルト】の仙人モードの目になってて、右側は【薬師カブト】の仙人モードの目になってる。それに髪も触ってみると、分身Ｄの言った通り少し粘着質な液体が張り付いてる、というより俺の髪から出てきてることが分かった。ＮＡＲＵＴＯの世界じゃ【仙術】の会得には妙木山、龍池洞、湿骨林にいる仙人の教えによって仙人モードの見た目が変わるらしいし、そのどちらかからも受けてない俺みたいなのがなるとこんな感じになるのか？
「これからは３つのバージョン別に分けることも必要みたいだな」
「だな。でも仙術チャクラは練れたんだろ？」→B
「それより、俺ちょっと見つけちゃったもんがあるんだよ」→A
「それはいったいなんだ、Ａ？」→D
「とりあえず、俺消えるから確認しといて！」ボン！
　言うが早いか、Ａはさっさと術を切って消えてしまった。それによってＡの記憶は分身の俺を含めて全員に行き渡る。それには俺が

入ってきたところと正反対から山に入ってきている複数人の姿が映っていた。
「なんだこれ？　山菜狩りにでも来てるのか？」→D
「いや、この中世レベルの世界で山菜が食えるって知ってるの、多分うちの村だけだぞ」→B
「じゃあ、山に入って猪狩りか？」→C
「それならもっと動きやすい服装でないと返り討ちに遭うぞ」
　この時期の猪なら繁殖に入って普段は森奥の棲み処から離れないし、あの人っていうか男らの恰好はどちらかというと・・・・・・・
「ハンター、か？」
「ウソだろ!?　まさかこの山に魔物がいるのか!?」→C
「待て待て、ならなんでオリジナルの感知に引っかからなかったんだ？」→D
「あー、じゃあ何だっていうんだ？」→B
「・・・・・これは言いたくないんだけど、というか思いつきたくなかったんだけど」
「「？」」
「もしかして山賊なんじゃね？」
「「！」」
　そうなんだよな～、ここけっこう自然豊かだし山暮らしするなら格別な場所だよな～。
「ついにこの山にまで山賊が来たのか・・・」
「ああ。だとすればあいつらはただの先行組」→B
「後からぞろぞろときて山を占領されたら、」→C
「俺の修行を見られてしまって・・・」→D
「「「最悪喧嘩ふっかけられる・・・!?」」」
　※作者：念のため言っておきますが、主人公くんはこの時から感知範囲は約１０ｋｍ、ただの正拳突きでも岩を粉砕できています※
「よし、迎え撃つか」
「「異議なし」」
　※作者：この時の彼はまだ１０歳なので、思考回路が肉体に引っ張

られています※
「B、Cは左右に展開、Dは後ろで挟み撃ちの陣形だ。いくぞ！」
「「応！」」

・・・・・・　少年　準備中　・・・・・・

一方、山に入った山賊・・・の、ように見えるハンターの集団に焦点を当てる。
「クソッ、なんで俺たちがこんな事を・・・」
「無駄口をたたくなっ。このままじゃ俺たちは満足に生きていけないんだぞ」
「分かってるけどよぉ～、ここまで来ると俺たちも堕ちるトコまで堕ちちまったって言うか・・・」
事情を先に話すと、彼等は討伐を依頼された猛獣や下級の魔物を倒すハンターチームだった。だが、魔物の発生が頻繁になったことが原因で、今までの資金繰りではうまくチームを運営できなくなった。深刻化するまでは、武器を粗悪品に変えたり日払いの力仕事を始めたりして生計を立てていたが、それが余計に彼等の心身を疲弊させていくだけだった。そんな折に、彼等のもとをある男が話を持ちかけた。王国の辺境にある村にいる白髪の子どもを連れてくれば、望むものを与える、といった内容だった。彼等も最初は訝しみ相手にしなかった。だが男の仲間が彼等の状況を皮肉って煽ってきたため思わずＯＫの返事を出してしまった。その上、彼等のチームの活動場所の領主の家紋が押された契約書を交わしてしまったため、断るわけにもいかず、こうして「フェイ」の村へ向かっているのだ。
「そもそも、なんで辺鄙な村にいる白髪のガキを連れて来いって言ったんだよ、あの野郎は」
「さぁな。お偉いさんがたの考えなんて、下々の俺らにゃ一生かかっても分かりゃしねぇよ」

「だが、この依頼を完遂すれば今の状況から抜け出せるんだ。その子どもには悪いとは思うが、俺たちも生活がかかってるんだってな」
そういいながら山道を歩き続けるハンター一行は、まだ自分たちの首を狩りに来る彼の存在を理解していなかった
「――――――止まれ！」
突如聞こえた幼い子どもの声にハンターは全員自分の武器の柄を触った。そして声の出所を探る。
「木の上だ！」
３人が上を見ると、枝の上にまだ背が低い子どもがいた。だが、顔には白い円を重ね合わせたかのような外形に片目の場所に穴が空いた仮面をつけていて、その表情は読めなかった。だが、それ以外の場所でハンターの探す予定だった子どもだとわかった。
「白髪・・・！」
「おいおい、ンじゃあのガキが目的の奴だってことか!?」
「探す手間が省けたが、なんだあの仮面は？」
子どもは木の枝に立ったまま問いかける
「おいお前ら、この山に何の用だ!?」
それにハンターは仲間と目線を合わせてすぐに子どもを拘束するための麻酔薬や縄を地面に落として、臨戦態勢になる。
「お前を連れて行けば、俺達は今まで通りの生活を続けられるんだ」
「だから、抵抗しないで降りて来い？　いい子だから」
そんな言葉を聞いて、子どもはハンターに呆れの声をかける。
「なあお前ら、こんな言葉を知っているか？」
「「？」」
「〝討っていいのは、討たれる覚悟のある奴だ〟って」
それを最後にハンターの背後から黒い触手のようなナニカと左右から同じ姿の子どもが現れる。
「な、なんだコレ!?」
「同じ子どもが３人!?」
「いや後ろにもいるぞ！」
「【影縛り】、成功！」←分身Ｄ

困惑している男達の前に、本体のマルトが木から飛び降りて彼等の前に立つ。
「さっき言っただろ？　んで、お前ら誰？　なんで俺を狙ったの？」
「そ、そんなこと聞いてどうすんだよ？」
「魔法が使えるなんて、やっぱこのガキやべぇよ！」
「・・・質問してるの俺のはずなんだけど、答えられないなんておっさんたちバカなの？」
「ンだとこのガキ！」
「よせと言っている！　少し落ち着け！」
「そっちのおっさんは会話ができそうだな・・・そっちの事情を聞かせてもらおうか？」
　子どもに言い聞かされて怒り心頭の1人を無視して、リーダー役の男がこれまでの経緯を簡単に教えた。その間に分身DとB、Cが縄で男達を近くの木に縛りつけていた。
「なるほど？　それでなんで俺がそいつらの標的にならないといけないんだ？」
「それは俺にもわからん。だが大きい街ほど、そういう暗い所は何処にでもあるもんだ」
「ふーん。ところで俺を連れて行くと何か貰えんのおっさんたち？」
「あ、ああ。報酬として望むものを与えると・・・」
「ならさー、ちょっとおっさんたちの予定よりも高めに貰ってその差額を俺にくれよ？」
「な！　何を言ってるんだ君は!?」
「俺自身は行かねえよ。でも俺は自分にそっくりな分身を作れるし、できたらおっさんたちを俺たちの村に匿ってくれるように説得してあげるよ？」
「何？」
「依頼を達成したと思って報酬あげたけどそれが偽物だったら只じゃおかないでしょ？」
「・・・・・・いや駄目だ。それじゃあ君の村にまで迷惑をかけてしまう」

「別にこのままでもおっさんたちみたいなのが来るんでしょ？　それに、おっさんたちも依頼主からバカにされて仕返ししてやろうと思わない？」
「・・・いったいお前は、何が望みなんだ？」
子どもとリーダーの会話に入り込むようにメンバーの一人が子どもの年齢にそぐわない言動に慄き、子どもに問い掛けた。
子どもは仮面の下であくどい笑みを浮かべてこう言った。
「ただのガキって言われて、頭に来ない子どもは居ないってことさ」
※作者：この時の彼は（ｒｙ
・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・
それから、分身Ｂに仕掛けを施してから解放したハンターの連中を引き返させたマルトは、そのまま村に帰った。
その夜、ある町の一角で爆発事件が起きた。警邏隊の調査で、以前から怪しげな行動をとっていた貴族の当主とその取り巻き数名が大火傷を負った。そして調査の最中に爆発でひしゃげた隠し扉から多数の不正の証拠が出てきたため、その貴族はお縄となった。その貴族は、「白髪の子どもに部屋を爆破された」と意味不明な供述をしているという。
余談だが、その夜は月を背後に家々の屋根を飛び移る人影があった、とかなんとか。
またこれは別の話だが、最近のマルトのいる村に３名の移住者が入って、村の整備や小さな子どもたちの教育係に精を出しているらしい。

「へへっ、ざまーみろだ！」

其の四　俺、妹に会うってばよ！

とある事件の後、村は特に面白いこともなく修行と自己鍛錬の日々を過ごしていた。俺の周りで変わったことと言えば、週に４回と決めた休日が２回に減った事くらい。理由は今の体なら修行程度の傷でも問題にならないと二人から認められたからだ。実際、傷を負っても医療忍術や仙術で完治余裕だからな。

で、その休日である今日、俺は大きく欠伸をしながら２階の自室から下に降りていった。

「ふぁ～あ、おはよう父さん母さん」

「おはよう！　眠そうだけどちゃんと起きる時間は守ってるわね」

既に朝御飯の用意がされている食卓に座って、窓から入り込んでくる絶妙な明るさの朝日を浴びる。

前世じゃ付き人がご飯作ってくれてたからな。今度は忍術以外にもチャレンジしてみるのもいいかもな。

「父さん、今日の作業はなんだっけ？」

「ああ、それだが、変更する」

「へ？」

昨日聞いた時には２、３個仕事があったと思うんだけど、急に変えるってそんなに重要な話なのか？

「昨日、早文が届いた」

「へ～、そこに書いてあったのが今日の予定？」

「ああ。あと、遠出になるから飯を済ませたらお前も荷物をまとめろ」

「は？」

暫く家を空ける？一体何の用なんだ？

「あ～な～た～？　内容が分からなくて、マールが困ってるわよ？」

「む・・・これでも用件は伝わるだろ」

「そんなのは昔だけよ。ごめんねマール」

さらっと罵倒された父さんの代わりに、母さんが内容を簡単に教えてくれた。まとめると、父さんのお姉さん（つまり俺の伯母さん）の子どもが誕生日を迎えるからパーティーをしようという事らしい。

それを聞いた時の俺は、まず最初に驚いた。
「父さんにお姉さんがいたの!?」
「そうよ。お父さんに全然似てない、いい人なのよ」
「似てない、は余計だろう・・・」
あの父さんにお姉さんがいたなんて思ってなかった俺には今日最大の事実だった。おかげで目が完全に覚めた。
「それにマールにとって妹ができたようなものだからちゃんとお祝いしないとね!」
「わかった、いただきます」
俺にとっての妹（正確には従妹）と会えるのか・・・、前世は家族を持たなかったから接し方みたいなのが全然わからないんだけど（汗。
その後、パーティーで必要なもの（服など）をまとめて、母さんの【異空間収納】に仕舞い込んでいく作業が続いた。
その途中、あることに気付いた俺は母さんに尋ねた。
「そういえば、パーティーってどこでやるの?」
「ふふふ♪　聞いて驚きなさい!　場所は【王都】よ!」

・・・・・・一家　移動中・・・・・・・

村を出発して3日と数時間かけて、漸く【王都】に着いた俺たちは馬車引きの人にお礼を言って入国待ちの列に並んだ。待っている間、伸びをしていると馬車に乗りっぱなしだったせいか体中のあちこちから関節の音が鳴っていた。面白いくらい鳴ったから両親と周りの人からも笑い声がしていた。
「あ～、馬車ってあんなに乗り辛い乗り物だったんだね」
「まぁな。実は速駆けの馬車を選んでいたんだ」
「え、嘘!?」
「ふふっ、本当よ。帰りの馬車はもっとゆっくりなものになるから」

そんな雑談をしていると前の人がどんどんいなくなって、俺たちの番になった。
「次」
「よろしく頼む、家族が2人いる」
「分りました、身分の証明を」
「ああ」
俺たちの代表で父さんが門番の兵と話して手続きを進めていた。そしてやっと俺たちは王都の中に入ることができた。
門を出た瞬間から屋台や露店が立ち並んで、行きかう人の顔も活力があったし、なにより見える範囲でも2、3個くらいある人に関連したお店があった。
「すげ～、これが王都なんだ！」
「そうだな、まだ時間としては朝早いから多く見えるな」
「あ、あのお店のお菓子は絶品だそうよ！　後で行きましょ！」
「ああ。だがまずは挨拶に行くぞ。マルト、離れるなよ」
「あ、うん！　ねえ母さん、あれが母さんが言ってた人？」
「え・・・ああ！　そうよ、あの御方が【賢者マーリン】様よ！」
「へー、結構そんなお店があるくらいだからやっぱり有名な人なんだね」
「ええ！　マーリン様と【導師メリダ】様の活躍は国中でいろんな人が本やお芝居にしているくらい有名だもの！」
確かに。歩き道にあったお店で買った【偉大な魔法使い様】ってタイトルで表紙にイケメンが書かれた本を開けるとその武勇伝が描かれていた。この国じゃ英雄だろうけど、ここまで美化されてたら本人はたまったもんじゃないな。俺なら【神威】で引き籠ってるわ・・・。
「でも今は賢者様って王都にいなんだよね？」
「ええ。賢者様もお年だから誰も知らない場所で静養されているらしいわ」
「おい、早く来い」
「あ、ごめんなさい。マールも行きましょ」
「うん、ごめん」

母さんの話も聞いていたいけど、まずは相手の家に挨拶だよね。急かす父さんに気づいた俺と母さんは後をついて行った。因みに、本は読んだから適当に近くにいた子どもにあげた。その子ども、なんで自分の手元に本があるのかわからないって顔してたけど内容が賢者様のだからって喜んでいた。あんなに小さくてもその価値がわかるんだな・・・賢者様に同情するよ。

・・・・・・・一家　移動中・・・・・・・

お店が並んでいたストリート的な場所を抜けて、俺たちはとある家の前まで来ていた。

「・・・これが男爵様の家？」

「この家は彼奴が一家で団欒のために建て直したらしい」

「まあ、ほかの貴族の家と比べるとねー」

母さんの言う通り、目の前にあるのは俺の前々世であった一軒家タイプのモデルルームくらいの家だった。なんでそれで俺が驚いているのかっていうと、普通の貴族が周りで巨大な屋敷を建てているってのに目の前のは想像より少し大きいだけの住宅だったからだ。

ゴンゴンと父さんが扉のノッカーを叩くと、出て来たのはロングスカートの（俺の中で）伝統的な恰好をしたメイドさんだった。

「これはバルド様とレイナ様、それとマルト様。御久しゅう御座います」

「【ドロシー】か」

「久し振り、ドロシーさん！　マルト、こちらは【ドロシー】さんで、この家のメイドさんよ」

「初めまして、マルト＝リグ・ヴェーダです」

「こちらこそ、【ドロシー＝スーディス】と申します」

紹介されたからにはと俺も名乗ってお辞儀をした。それでドロシーさんも頭を下げたけど、さすが本物のメイドだと言うくらい所作

がキッチリしていて、よく訓練されてるんだろうな。
「旦那様方もお待ちしています。どうぞ、こちらへ」
「ああ、邪魔させてもらうぞ」
「「お邪魔します」」
　ドロシーさんの案内で家の中に入らせてもらった。外から見た感じのまま、中も俺にとって普通の家だった。金持ちの家で連想されるような動物のはく製や派手な照明も無い、行ってみれば少し間取りが広いだけで俺の家と変わらなかった。だからかな、人の家だと感じなくて落ち着いた気分になる。
「お召し物はこちらで。奥の部屋に旦那様方が」
「助かる」
　俺たちの上着を受け取って別の場所に行ったドロシーさんと別れて、示された部屋の扉を開けた。
「バルド、久しぶりだな！」
「そっちのほうこそ、息災なようだな【クロノ】」
「【クララ】、久しぶりー！」
「レイナさん、私も会えて嬉しいです・・・！」
　父さんが茶髪の男の人、母さんが紫色の髪をした女の人と和気藹々と話し始めた。
（男の人の方は初めてだけど、女の人の方が父さんのお姉さんか）
　思ったのがあんまり似てないなってことだった。姉弟なんだから、もっと特徴で似ているところがあると思ったけど・・・。
　そして、
「・・・」
「ん？」
「・・・（じぃー）」
　さっき母さんが【クララ】と呼んでいた人のそばから俺をじっと見つめてくる女の子がいた。その子は青紫色の長い髪をしていて、おそらく母親譲りのかわいい見た目の子どもだった。
（この子が例の従妹・・・なのか？　でもなんで）
　〝あいつ〟と同じ気配がしているんだ？

「あ・・・ほら、【リリィ】も」
「マルト、自己紹介しなさい」
「え、ああ・・・初めましてマルト＝リグ・ヴェーダです」
「初めまして、【クロノ＝フォン＝アルターレ】だ。こっちは妻の【クララ】だ」
「ふふ、初めましてマルト君」
「それで、そこにいるのがお前の子か」
「ああ、クララに似てかわいらしいだろう？」
「ほんと、お人形さんみたい！」
「ほら、ご挨拶しなさい」
「は、初めまして・・・【リリシア＝フォン＝アルターレ】、です」
　おどおどしながら挨拶をしたその子の様子に、俺はさっきから消えない既視感の正体を考えていた。
　というか確信しかなかったから同じ目線まで体を落として周りに聞こえない程度に聞いてみた。
「なぁ」
「は、はい」
「リリシアって、もしかして・・・〝お前〟・・・か？」
　俺が聞くと、その子は目を開かせてパチパチしたと思ったら、なんでか俺に抱き着いてきた。
「お、おい！」
「やっぱり、約束を忘れないでいてくれたんですね・・・！」
「・・・当たり前だろうが。前世も前前世も、今も、俺は自分の言った言葉を曲げたりなんかしねぇんだよ」
　お互いにしか聞こえない声で感動の再開をしたと思ったら、そばで見ていた人たちがいたことに気づいて瞬時に離れた。
「あらあら♪」
「やはり子ども同士となると仲が良くなるのが早い」
「あの人見知りのリリィがあそこまで大胆になるなんてね」
「これは良い物が見れました」
「はわ、はわわ・・・」

「みなさん、そこまでにしましょうよ・・・」
俺はともかく〝こいつ〟の体温が急上昇しちゃってるから。
で、まずは〝こいつ〟・・・はもう呼べないか・・・リリィの復活まで待ってからパーティーの打ち合わせをした。言う事もなく夜にそこそこ大人数でやるらしい。大人たちは先に会場の設営や料理の準備があるということで、まだまだ子どもな俺とリリィ（中身は成人レベル）は部屋で待機となった。
まあ主賓のリリィにネタバレしちゃうのもあれか。
「しかし、〝お前〟が女だったとは驚いたな。てっきり男だと思ってた」
「あれは上の存在が私たちに形を与えなかったからですよ。【戦乙女】のような物は頻繁に人間と交信するから人の形を持っているんです」
「あの黄昏のスカウトレディースもそうなのか」
リリィが住んでいる部屋にお邪魔している俺はドロシーさんがくれたお茶とお菓子をつまみながらリリィと主に俺が再転生してから今までのことを話しあっていた。やっぱりリリィも俺が行ってからも諸々の仕事をしてて、それが済んですぐにこの世界に転生したそうだ。それで俺と歳の差が開いちまってたってことか。それでも俺の従妹として転生できてるあたりは、なにか俺との縁があったからかもな。
「俺が来るまで何をしてたんだ？」
「えっと、お父様からは魔道具のことを教わりました。お母様は普段から礼儀作法を少々」
「クロノさんだっけ。あの人あまり戦闘向きじゃないと思ったんだけど」
「はい。お父様自身は大したことのない普通の魔法師だとおっしゃってて、その穴埋めに魔道具を活用していた、と」
「なるほど、足りない物は外から持ってくる人だったのか。リリィは魔法についてはどれくらいなんだ？」
「えっと、まだ水や風を少量生み出すくらいしか・・・」
「それって魔法が苦手だからか？」

「いっ、いえ！　魔法に関しては問題がないのですが、炎や雷といった物は発生の原理からできないと先入観があって・・・」
「あー、なるほど」
　リリィの言葉には俺も聞いたことがあった。母さんの話で魔法師には万能型と単一型があって、俺と母さんは万能型、リリィや父さんみたいなのが単一型にあたるらしい。
　なんで分けられるのかというと単純に個人の戦闘スタイルに合わせている人や魔法の発動で欠かせないイメージの構築ができない人との差が原因みたい。そんでイメージの構築ができないのは理論で考えちゃうのと漠然としたものにしかできない人にも分けられるらしい。今の話で行くとリリィは普段目にする水や感じ取れる風はイメージしやすくて、燃料がないと出ない火や雨の日にしか出てこない雷を自分で作る感覚が分からなくて苦手、と言う事になる。
「じゃあ今度、俺が忍術教えようか？」
「い、いいのですか!?」
「ああ。忍術なら印で性質変化を促せるからとっつきやすいと思うぞ」
「ではぜひお願いしますね、〝お兄様〟！」
「おう！　ってお兄様？」
「あ、こう呼ぶのだとお母様から教わって・・・駄目でした？」
「いや別に、俺も呼ばれ慣れてなかったからびっくりしたんだよ」
　それに5歳児の上目の視線で見られたら断れないと思うんだが（確信
「マール、ちょっといいー？」
「母さん？　わかった。じゃあまたあとでな」
「はい！」
　ドアから顔をのぞかせてきた母さんに呼ばれたから、一時退室する。
「どうしたの母さん？」
「ふっふふーん♪　マールにちょっとお願いがあってね？」
「お願い？」

母さんのお願いを聞いて、またリリィが潰れてしまうだろうと思った俺はウキウキ気分の母さんの後ろでため息をついた。

・・・・・・主人公たち　準備中・・・・・・

準備も終わってクロノさんたちの知り合いの入場が始まった。リリィ専用の特別な席のそばのカーテンから様子を見てた感じ、かなりの人が来てるな。みんな身形が上等だし、振舞いも落ち着いてる。先に会場で談笑しているクロノさんとクララさんにも劣らない、本物の貴族だと思う。

あ、母さんたちもちゃんと入口から来てるな。付き合いが長くて知り合いでもそこは身分を考えてのことらしく、入口から紺一色のスーツに白色のネクタイとスカーフの父さんと、ワインレッドの裾が膝程度までのスカートドレスを着た母さんが入ると、人の会話であふれていた会場が静かになった。その後、クロノさん夫婦とタメ口で話しているところを見せられた客たちは、父さんたちのことをどこの家の者だと考えているみたいだ。

「さすが父さんたち、あっという間に会場の注目を支配しちゃったよ」

「マルト様」

「あ、ドロシーさん」

「お嬢様の着替えが終わりました。

あと、私のことはドロシー、と呼び捨てになさってください」

「あー、了解、ドロシー。それでリリィは？」

「私の後ろにおります。さ、リリシアお嬢様」

「は、はい・・・」

ドロシーさんの背後から出てきたリリィを見て、思わず息を呑んだ。

髪の色に合わせて空色とも言うべきロングスカートのシンプルデザインのドレスに身を包んだリリィは妖精のようにみえた。背中ま

で伸びた長い髪もシニヨンにしているからか、幼さの中に大人びた感じも出てきて見た目からはとても5歳の女の子だと考えられなかった。
「ど、どうでしょうか？」
「え？　ああ、めっちゃ似合ってる。可愛いというか、綺麗だ」
「ありがとうございます！」
「それでは、私は主様に御報告をしてきますので、御二方は心構えの準備をお願いします」
「うん、了解」
「？　心構え？」
　あ、首傾げてるの可愛い。んでこの反応、リリィ真っ赤案件不可避。
「失礼致します、ご主人様。お嬢様の支度が整いました」
「お、そうか・・・皆さま、長らくお待たせ致しました！　それではこのパーティの主役に御登場願おうと思います！」
　オオ、と会場の注目をこっちに集めたクロノさんは、後でリリィから怒られてしまえ。そんな思考になってたけど、とりあえずやることはやろう、うん。
　どういうことがわかってないリリィの手をそっと取って準備する。
「あの、お兄様？　一体なにが始まるのですか？　何故私の背丈に合わせるように膝立ちなされるのですか？」
「ああ、これについては父さん達に怒ってくれ」
「へ？」
「ステージをご覧下さい、我が愛娘リリシアです！」
「行くぞ!!」
「へ!?」
　咄嗟で硬直したリリィを持ち上げて、その隙に膝裏と右脇の下に腕を通して抱え込む。そして【強化】で跳躍力を上げて垂れ幕から一気に会場のど真ん中、観客の頭上より上に跳び出す。
　あれは何だ、飛んだぞ、あそこにいるのはリリシアお嬢様か、なんて声が聞こえてくるのとリリィの慌てふためきようをセットで流して、足裏に上昇気流を起こして体を支えながら、階段を下りていくよ

うに降下していく。その道中、観客の方々にリリィの真っ赤な顔を見せていくサービスも忘れずに。
「おおおおおおおおおおおお、おにいさま!?」
「リリィ、言いたいことはわかるが、ここは令嬢らしいとこを見せてやらないと。笑顔さ」
「は、はいぃ・・・」
ただ降りるだけじゃなく、風の向きで服をはためかせたり蛍火のような火の玉を大量に、沢山の色を浮かべたりしてリリィの魅力を存分に上げてやることも忘れない。
恥かくなら散々暴れてやろうじゃないか。
ゆっくりと10分くらい、ステージに降り立って腕の中のお嬢様を丁重に椅子に座らせる、というかもたれ掛けさせた。当の本人のキャパが焼き切れて復活までもう暫くかかりそうだ。
やることをやった俺は、リリィの前で観客たちに振り返ってさっと一礼してそそくさと舞台袖に引っ込む。
・・・ワッッッッッーーーーーーー!!!!
全てが終わったと悟ったお客さんからの溢れんばかりの歓声と拍手が鳴り響き、幾分恥ずかしさは和らいだ。ドロシーが用意してくれたグラスの飲み物を一気飲みして喉の渇きを潤す。
「流石はレイナ様のご子息様。魔法の多重発動、複合操作を行いながら、抱いていたリリシア様に危害が及ばぬよう【防御壁】で守って差し上げるという芸当は、一級の魔法師の実力と匹敵するかと」
「はは、母さんからは魔法を使うときはいつも考えて使うように躾られてたから。それより、リリィは大丈夫?」
「はい。只今化粧直しということで別所で休んでおいでです」
なら俺もこっそりと会場に行こうとした所で、ドロシーから一言。
「マルト様は身なりを整えられた後、ご主人様の元に向かうように」
「え」
「先程の事で、客人たちから質問が殺到しているとのことです」
どうやら派手にやり過ぎたせいで、客の中から魔法関係の人達が俺の事を聞きたいらしい。まあ最初は普通に降りてくるだけの予定

だったから、クロノさん達もびっくりしたんだろうな。
　ドロシーから言われた通り、服を着替えて髪型を整えてから会場の裏から中に入っていった。
「やあ、マルト君」
「クロノ様、先程の余興は如何でしたでしょうか」
　パーティが始まる前から言葉遣いに気をつけるよう言われてたからな、あまりかしこまり過ぎない程度に敬語を使って、それでいてさっきのアレがこの家公認だったことを仄めかしておく事を忘れない。
「とても良かったよ。君も、パーティに参加しなさい」
「有難う御座います。楽しませていただきます」
「アルターレ殿、彼が、そうなのか？」
「ええ。彼が、私が招待し今回の余興を行った魔法師です」
　オオッ・・・！と、周りからの歓声が上がってきた。
　注目がこっちに集まってるから、さっきと同じ礼をしておく。そしてクロノさん繋がりで貴族の人たちと会話が始まった。
　Q．魔法は何処で習った？
「母と魔道書を使いながら習得してました」
　Q．何処の領地の者だ？
「東の外れ、何の変哲も無い小村の生まれです」
　Q．クロノさんとはどういった経緯で知り合った？
「両親で、付き合いがありまして・・・」
　Q．さっきの余興は俺1人で考えたのか？
「はい。リハーサルはしましたが、パフォーマンスとは御当主がたも含めて皆に魅せる物。内容は先程まで隠しておりました」
　そんな感じで、具体的には言わない政治家のようにして怒涛の質問ラッシュを耐えきった俺は、まだ子どもってこじつけでさっさとパーティの料理にありつく事にした。後のことはクロノさんにぶん投げる。

その後、復活したリリィへのプレゼント贈呈が始まって、俺が用意した木彫り人形のスケールにまた会場を騒がせたのは割愛で！

其の五　俺、１５歳になったってばよ！

「賢者の孫」基準　シン・ウォルフォードが１５歳のとき

　初めての王都訪問から懐かしい奴との意外な再会、母さんの無茶ぶりから始まった即興のパフォーマンス。いま挙げてみると、濃密どころかもはや固体レベルにまで詰まったリリィの誕生日パーティの後、俺達はそれぞれの日常に帰って日々を過ごしていた。
　ただ、あれからもクロノさん達は毎年の夏に避暑の為に俺のいる村に遊びに来るようになった。その時に村の皆と遊んだり、裏山の修行場でリリィの忍術修行をしたりするようになった。村の方も、王都っていう村人の憧れの場所から来た貴族様にかしこまってたけど、呑み会で父さんとの過去話を聞いてすぐに打ち解けてしまった。
　それ以外だと最近の俺は多由良の幻術に使う笛を吹き始めたくらいか。知識はないからとにかく影分身を使ってやっと人前でも聴かせられるくらいまでに上達したと思う。
　で、再転生した俺は、ついに一つの転機を迎えた。
「それじゃ、みんなグラスを持った？　せーの！」
「「「「「「マルト、誕生日おめでとう！　乾杯ー!!」」」」」」
「みんな、ありがとう!!」
「僕達が会ってから5年だけど、やっぱり子どもって成長が早いね」
「はい。あの時はまだ幼かったように見えましたけど、立派になりましたね」
「私はバルドみたいにぶすっとした顔にならないか不安だったけどね～」
「・・・それを言われて、俺はどう反応すればいいのだ？」
　確かに何年か前から筋肉がついてきて父さんに近づいてきた感触はあったし、背丈で言えばこの村の男子の中で一番大きくなった。これなら【八門遁甲】の門を開いていっても大丈夫かなと思ったのは事実。だけどそれを聞いたリリィから涙目で「そんな危ない術は絶対に使わないでください!!!」って懇願されたから今生の【八門遁甲】は見

送りとなりました。撃ってみたかったんだけどな、【昼虎】。
「お兄様？」
「お、どうしたよリリィ」
「いえ、なんだかお兄様から不穏な魔力を感じたので・・・」
「なんでこんなお祝いごとに魔力を使わないといけないんだよ？」
　あっっっぶね！なんでかリリィに考えたことが読まれてたことにビビったけど何事もないように取り繕うことで難を逃れた。我が従妹ながら恐ろしい・・・！
「そういえば、マルト君はこれからどうするんだい？」
「え、どうするって？」
「君のような才能溢れた子は世界中探してもそうはいないと思うよ。勿論、選ぶのは君次第だけど僕としては学院に入学して【魔法師】の道を歩んでもらいたいと思っている」
「クロノさん・・・」
「まぁ、もしそうなればウチから通って行けるし、クララもリリィも喜ぶんだけどね」
「あら♪」「お父様⁉」
「結局あんたの惚気か、この⁉」
　あれ、進路の話かなって思ったらそのまま夫婦のラブラブ感を見せつけられたんだけど。せっかく主人公見たく常識知らずをアピールできるかと思ったんだけど。
　※ここで常識知らずをアピールすると、もれなく泥酔者四人による地獄のセミナーを受けることになっていたという事を、この主人公くんは知らない※
　あ、また電波が・・・。それにしても進路かー。
「俺はまだ村のみんなといたいんだけど」
「よ、流石我らの坊ちゃん！」
「【クー】、言葉が軽すぎる。今は若の大事な時なのだぞ！」
「そう言う【リク】のリーダーも、実は坊ちゃんに残って欲しいんだって知ってんだぜ俺は？」
「な、貴様は・・・！」

「ふぁふぁふぁ、確かにこの村と縁を繋げてくれたのは他でもない若かりし時の坊主だったんだからな！　ほかの連中よりリクが思い入れするのも無理はないじゃろうて！」
【カイ】！　お前までもか・・・！」
　ここで会話をはさんできたのは、いつかの襲撃犯だったハンターの人達だ。いつも調子が良く俺を坊ちゃんと言ってくるのがクーさん、それを注意している突っ込み役の、俺のことを若って言うのがリクさん。そして常に笑っている一番年上の坊主呼びの人がカイさん。この人達は村に来てからすぐに村の皆に自分達のしようとしたことを懺悔して、受け入れられてからは村の働き手と子どもの教育係をしてくれるようになった。俺のことに関してはあの時の変装で髪まで隠さなかったせいで一瞬で分られてからは、三人の上司みたいな扱いを受けている。やっぱり【グルグル】のほうが良かったのかな。
「あたしはクロノの考えに賛成よ。マールの魔法の技術はあたしの予想よりも超えてるし、いつまでもあたしだけが教えてたら知識に偏りができちゃうと思うの」
「ああ、だがマルトはここに残りたいとも言っているんだ。それも尊重してやれ」
「わかってるわよ、もう・・・」
　父さんたちは俺を王都に行ってもらいたいみたいだ。それは、俺が新しく転生するときに目指していた目標だった。
　けど今まで村で生活してきたせいか、今のスローライフもいいんじゃないかとも思ってきていて、どうすればいいのか分からないんだ。結局俺は何も言えず、父さんたちも考える時間が欲しいのだろうと、その話題に触れずにパーティを過ごした。

・・・・・・少年　満喫？中・・・・・・・

「そんじゃ、今日はごちそうさんした！」

「いーえ、今日の為に材料を揃えてくださったのだからお気になさらず！」
「若、もしも私達のようにハンターを目指すのでしたら是非我々を共に」
「ありがとうリクさん、考えが纏まったら伝えに行くよ」
「ふぁふぁ、結局今回も引き分けじゃったか！　次はもうちょい強い酒を持ってくるかの」
「ああ。お前の持ってくる酒はいつも俺を楽しませてくれるからな、次が楽しみだな」
　玄関先でソラリクカイの連中が帰っていくのを見送った後、俺達はテーブルの散らかりの片づけを始めた。父さん達は家中の飾りを箱に戻し始めていた。因みに、村の外からやってきているクロノさん一家は寝泊りを俺の家でしている。この家を3人で住んでも部屋が余っていた故に始めた事だった。
「この先、どうすればいいのかな」
「お兄様？」
　一緒に片づけを手伝ってくれているリリィの姿を見る。あの時から5年が経って、リリィもクララさんのような長い髪が似合う美少女に育ってきている。つまりそれだけの年月が経っているというわけだ。
　今、父さんたちは遠くにいるから俺達だけの秘密の会話ができる。
「リリィは将来どうするんだ？　やっぱり家を継ぐのか？」
「はい。お父様とお母様は自由に選びなさいと仰られましたが、私を生んで下さった両親への恩返しになればと思うとやはりそれがベストだと思いました」
「そっか・・・俺さ、前世じゃ親とかいなかったから基本的に自由でいられたんだよ。でも今は父さんと母さん、クロノさんとクララさんとリリィ、フェイの村の人達のおかげで【マルト＝リグ・ヴェーダ（今の俺）】ができているんだ。それで言えば、俺も皆に恩を返せる方法があればそれを選びたい。でも何があるのかわからなくてドン詰まりになってきているのも感じてるんだよなー」

まったく、こんなんじゃ【六道仙人】の名が廃っちまうよ。
「私はお兄様の意思を尊重します」
「リリィ・・・」
「私が今こうして現世に降りるきっかけを与えてくれたのは、ほかならぬお兄様のお言葉があったからです。そのおかげで私は人の幸福というものを知ることができました。それが、とても尊い物なのだと」
「・・・・・・」
「何もこの世界の主人公のように生きる必要もありません。お兄様はお兄様の思った通りに生きていいのです」
「・・・・・・そっか。サンキュー、な！」
「ひゃ!?　いきなり頭を撫でてこないでください！」
「ははっ、悪い悪い」
　でもありがとうな、リリィ。
あの時、お前を誘ったのを俺は自分の我儘を言った感じで後悔の念があったんだ。それをお前は本心から受け入れ、感謝までされていたってことを知った今の俺には、もう迷いなんかなかった。
「行くぜ、王都に」
「お兄様？」
「もう迷わないぜ。
　王都に行って【賢者の孫】と同じくらい強くなって、この世界の災い全部、俺がブッ飛ばしてやる」
　そして。
「作ってやる。リリィや父さん達が、幸福に平穏な日常を送れる世界を」
　かつて、魔法の根源である術式【忍術】を作り出し世界にその名を轟かせた【六道仙人】が。
　自らが築きあげた【里】が滅び、現代にいたるまでの数百年の時を経て、いま復活する。
「俺はマルト=リグ・ヴェーダ、今は只の【忍(しのび)】だ」

次章に続く・・・・・・・・・

To Be The Next Chapter・・・・・・・・・

ここで息抜き　キャラ紹介

本作主人公
名前　マルト＝リグ・ヴェーダ　１５歳
元六道仙人（自称）
現在は勘を取り戻すために修行中＆前回出来なかったことに挑戦中。
今は笛、剣術を習得中。
魔法について：中堅クラスの魔法師と同等。
忍術について：下～中忍レベルの忍術をマスター。
仙術について：個別の仙人モードは現在できていない。
体術について：前世と同じレベルまで強化完了。
見た目のイメージ
Ｆａｔｅ／ＥＸＴＥＬＬＡ　よりカルナに筋肉の付き方が上方修正した感じ（細マッチョ体型）

オリジナルヒロイン
名前　リリシア＝フォン＝アルターレ　１０歳
正体は主人公と最初に出会った〝あいつ〟
主人公の２回目の転生の後自らも転生、男爵家の令嬢として誕生する。
両親の関係上、主人公とは従妹の関係にあたる。主人公との仲は良好。
現在は魔法と貴族としての心得を勉強している。
見た目のイメージ
Ｆａｔｅ／ｅｘｔｒａＣＣＣ　よりメルトリリスの目尻を少し下げた感じ

主人公の両親
名前　バルド＝リグ・ヴェーダ
主人公の父親でリグ・ヴェーダ家の家長

主人公の父親にして剣の師匠。魔法は身体強化しか使わない純戦士タイプ。
口数は少なく、主人公の修行の相手をしている筈が一度火が点くと真剣勝負になっていることがしばしば。そのせいで妻に叱られている。
見た目のイメージ
Ｆａｔｅ／Ｇｒａｎｄ　Ｏｒｄｅｒ　よりシグルドがメガネを取った感じ

名前　レイナ＝リグ・ヴェーダ
主人公の母親
主人公の母親にして魔法の師匠。魔法で他を圧倒していく知識系魔法師。
活発な性格で家事をそつなくこなすが、怒らせるとめっさ怖い。
主に怒らせるのは夫の方。
見た目のイメージ
Ｆａｔｅ／Ｇｒａｎｄ　Ｏｒｄｅｒ　よりエレナ・ブラヴァツキーを大人に成長させた感じ

ヒロインの両親
名前　クロノ＝フォン＝アルターレ
ヒロインの父親でアルターレ家の家長
ヒロインの父親で男爵位を持つ貴族。魔道具の扱いが得意。
ヒロインの魔法の先生をしており、家族を大事にする性格の持ち主。
昔は魔法師として戦闘した経験を持つ。
見た目のイメージ
Ｆａｔｅ／ｅｘｔｒａ　より岸波白野を大人っぽくさせた感じ

名前　クララ＝フォン＝アルターレ
ヒロインの母親

ヒロインの母親でバルドの姉。つまり主人公の伯母にあたる。治癒の魔法が得意。
ヒロインの礼儀作法の先生をしていて、虫をも殺さずに外に逃がすくらい博愛主義。
主人公のことも家族のようにやさしく接している。
見た目のイメージ
Ｆａｔｅ／ｅｘｔｒａＣＣＣ　より桜を大人っぽくさせた感じ

アルターレ家のメイド
名前　ドロシー＝スーディス
邸宅の守護と家事の補助をしている唯一のメイドさん。普段着でもブリテッィシュ風のメイド服を着ている。アルターレ家とも良好な関係を持っており、ある意味家族の一員のような存在。何事にも動じないがとあることが趣味らしく・・・
見た目のイメージ
ガンダムブレイカー３　よりドロシー

フェイの村の住人
リクカイクーの３人
幼いころの主人公を誘拐しようとし、逆にお縄となって主人公の仕返しがてら依頼主を社会的に消した後、主人公の村に住みついた元ハンターチーム。
同業者の中でも中堅レベルの実力を持っていた。
見た目のイメージ
リク→褐色肌に黒いドレッドヘアー　年は３人の中で真ん中くらい
カイ→皺の目立つ顔と白髪　年は一番上
クー→蒼髪に赤い目をしている　年は一番下

1章　　―2nd　STAGE―
其の六　俺、早速会ってみたってばよ！

転生者にして六道仙人（自称）のマルト＝リグ・ヴェーダの朝は早い。
空が白んだばかりの時間から起床し、鍛練用の服に着替えてから自分が下宿しているアルターレ邸を出発。まずは朝市などが行われる広場までランニング。次に広場で仮想敵との組手。気分次第で対人から対魔物戦闘まで幅の広いパターンを想定し、徒手空拳、その辺にあった木の棒で剣や槍の真似をして戦う。そして己の中で決着がついて玉のような汗を掻いた彼は、それを服の袖で適当に拭って、点々と開店し始めた出店を冷やかしてから帰路に着く。
※作者：ここからは主人公視点
「お帰りなさいませ、マルト様」
「ただいま、ドロシー」
玄関先でドロシーに会い、彼女が持っていたタオルを受け取り顔の汗を拭きとる。
「クロノさん達は？」
「先ほど起床なされました。もうすぐ朝食の用意が整うかと」
「じゃあそれまでに汗を流そうかな」
「畏まりました」
そう言って家の中に入り、ドロシーに用意してもらった丁度いい温度のお湯と別のタオルで体を拭いてから普段着に着替える。着替えを済ませた後は食堂へ向かった。
「ただいま帰りました」
「おかえり、マルト君」
「おかえりなさい」
「おかえりなさいませ、お兄様！」
クロノさん達に迎えられて、自分の席に着いた。
「それじゃあ、朝食にしようか」

そして、シェフ達が作ってきたご飯を食べ始める。
「もうじき【学院】の試験が始まるけど、勉強は捗っているかい？」
「大丈夫です、不安な所はその都度繰り返しで覚えるようにしてますから」
「ふふっ♪お勉強もいいけど、試験には魔法実技もありますから、ちゃんと準備しないといけませんよ？」
「大丈夫です、お兄様のお力はすでに一流です！」
「サンキュ、リリィ」
なんてことを話して朝食後、俺は2度目の町の広場へ足を運んだ。しばらく店を回っていると、
「ん？　これは・・・」
さっきまでバラバラに動いていた町の人々が、突然どこかへ向かい始めていた。それはさながら餌に群がる鯉みたいに一目散に走っていた。
「この方向は、通用門だったな。少し探ってみるか、【白眼】！」
白眼を通して不必要な情報を除き、その先にあったのは周りと比べて圧倒的に魔力量が高い3つの気配だった。
「ああ、そうか。ようやく到着したか」
その気配は俺が知らない物だったが、この時期とこの光景が、俺に1つの真実を見せてくれた。
「待ちくたびれたよ。【賢者の孫】、【シン＝ウォルフォード】君」

あれだけ騒ぎになると収束に時間がかかると判断した俺は、なおも門に向かう人達の間を摺り抜けて家へと向かった。家に戻って、クロノさんとクララさんにさっきまでのことを話した。
「というわけで、暫く市場は混乱するだろうと思ったんで早く帰ってきたんです」

「そうだったのか。お疲れ様」
「いえ。それじゃあ俺、もうしばらく出かけてきます」
「あら、大丈夫でしょうか」
「何があったのか気になりますし、もう騒ぎも収まったと思いますよ」
影分身からの確定情報もあるしな。
「それじゃあ行ってきますね」
「は～い♪」
さて、それじゃ行ってみますか！

・・・・・・少年　移動中・・・・・・

場所はさっきと同じ市場。ただ見た目は静かになったけど道端での立ち話で賢者や導師、孫というワードが聞こえてきている。
目標はその孫に会うことだけど、影分身２０人で町全体を探しているし、いざとなったら【瞬神の術】で行けば大丈夫だろ。それまではぶらりと出店を回ろうかと思っていた矢先だった。

「ん？」
途中で分身の一体からの記憶が入ってくる。まず人通りのない裏路地まで走って・・・瞬神の術！

・・・・・・少年　（瞬間）移動中・・・・・・

到着！さてさて現場はどこかな～？
「あ、本体か」
「おお、お前は分身Ｈか。場所は？」
「あそこだ。そんで、あれだ」

確かに、分身が見つけた場所にガラの悪い野郎と美少女がいる。よし、早速原作介入でも行くか！
「あー・・・そこのお嬢さん方、お困りですか？」
キターーーー、世間知らずの助け舟ー！
「はい、超お困りです！」
どんな返事もキター！って叫んでる場合じゃないな。
「オレらはいつも魔物狩ってコイツら守ってやってんだ！」
「正義の味方はむしろオレらの方だろ！」
「ひゃっはっはっはっ！」
うっわ、改めて聞くとチンピラ感を出しすぎだろｗ
「魔物狩るのは正義の味方かもしれないけど――女の子まで狩っちゃったら悪人だよ？」
それもそうだ。人と魔物じゃ全然違うし、何より。
「そんな品の無い誘い方もどうかと思うね。正直言って、この子達に偏見を持たせたらどうしてくれるんだか」
「「ああ!?」」
「「!?」」
突然横から失礼すると、こっちに怒りと驚きの表情を半々で見られた。まあここまで魔力やら気配やらを全部消してたからそれも当たり前か。チンピラｓはさっきの一言で完全に頭に来ているのか青筋を立たせてるし。ぷぷっ、クソ笑えるｗｗｗ
「んだとガキ共コラァ！」
「死ねや！」
おお、突然の戦闘シーンか!?じゃあ遠慮なく、
「俺が後ろのヤるよ。答えは聞いてない♪」
「お、おい!!」
拳を出してきたチンピラＡの腕を足場に、チンピラＢの肩で踏み切って跳ぶ。その先には腰の剣に手をかけるチンピラＣの姿が。
「な、なっ!!?」
「危ないなぁ、剣なんか出そうとして」
驚いている隙に剣の柄頭に手を付けて刃を抜けなくさせる。

そして残った右手の小指から順番に握り締めて叫ぶ！
「しゃああああんなろおおおお!!」
「ぷっげぇぇぇ!!」
チャクラ込みの拳でブン殴られたチンピラCは、カエルの断末魔のような声を上げて錐揉み回転をしながら地面に倒れ伏す。
「うわぁ～・・・」
「お、男の人があんなに飛んだの初めて見た」
（そもそも気配が全く無かったけど、アイツ誰だ？）
「あ、誰かコイツら縛る道具くれません？」
それからどこかのお店で使ってた縄を拝借してチンピラｓをふん縛った後、俺はさっきの3人を連れてカフェで一息ついた。
「さっきは災難だったな、お二人さん」
「全くよ！　魔法が使えたらあんな連中、簡単にやっつけられたのに」
「駄目だよ【マリア】。街中で攻撃魔法を使うのは禁止されてるんだよ？」
そんなこんなで、偶然にしろ知り合った（知り合わせた）俺たちは自己紹介することに。
「私はマリア。こっちは【シシリー】よ」
「シシリー、です」
「俺は【シン】」
「俺はマルトだ。親しい人達からはマールって呼ばれてるから、好きな方で呼んでくれ。よろしくな」
それから後日やる試験の話に変わって、シンと俺も受けると聞いたマリアとシシリーが驚いたり、俺が広場の連中から【白髪のヤベー奴（ホワイトウォリアー）】と呼ばれていることを知ったりしてたら時間があっという間に過ぎてたから俺達は別れた。
後は原作通りに試験会場でシンがテンプレ坊ちゃん（カー何ちゃら）や腹黒王子（オーグ）とのイベントで注目を浴びているのを合流したマリア＆シシリーと見た後、試験が始まった。
試験は筆記と実技で、筆記は国の歴史と社会情勢、あとは簡単な計算問題だった。正直歴史は俺が関係してる事柄があって楽勝だった

し、社会や計算は転生者の俺にはただの睡眠時間でしかなかったぜ。
「さーて、あとは実技か」
「あ、マールじゃない！」
「おー、マリアか。試験はどうだった？」
「あれくらいどうってことないわ。アンタこそ始まってすぐに寝ちゃって、本当に大丈夫なのかしら？」
「それこそどうってことはなかったな」
　待ち時間で同室だったマリアと談笑して、またバラバラになって会場移動。遂に実技が始まった。
「それでは1人ずつ得意な魔法を的に向けて放ってください」
　それから受験者たちは各々の魔法を出して的に当てたり外したりしてた。ただなぁ、
（詠唱は只の飾りなんだけどなぁ）
「【ファイヤーボール】！」
「【召雷弾】！」
「覇道の九十、【黒棺】！」
（しかも名前に捻りがなさすぎて対策立て放題だし・・・ちょっと待て、今決闘者と死神いただろ!?）
「ん？君、残っているのは君だけだよ」
「あ、すいません」
　試験管に促されて的の前に。
　何の術にしようかなと考えてた時、周りが勝手に自分の才能に臆していると思って笑ってた。
　イラっとした。
（ふふふ、それなら見せてやるよ。これが本当の炎魔法だ）
　ＮＡＲＵＴＯ式印のうち、巳→未→申→亥→午→寅で組んで、口内にチャクラを練る、性質変化で炎にして、息を吹きかける要領で吐き出す！
　火遁・【豪火球の術】！
　ゴオオオオオ！と空気を切り裂いて炎は突き進み、的に着弾した直後には的を炭化させ、しかも他の的をも燃やしてみせた。

「「「・・・・・・」」」
「これは凄いですね、かなりの上位魔法に値しますよ。ところでその手の動きは必要ですか？」
「あった方がイメージしやすいんで」
的があった周辺を焦がした俺の豪火球を見ても動じないこの試験管、かなりの手練れだな？他の奴らは唖然としてるし、いい気味だｗ
ドゴオオオォォォ!!
「「「!!??」」」
「おや、これはまた随分と派手に魔法を出す子がいるんですね」
あ、これはシンだな。俺もそっちの組に行けたら面白い物が見れたかもしれなかったな。
「はい。これでみなさんの試験は終了です。お帰りは気をつけて」
後日合否発表はするらしいけど、ミスはしてなかったし余裕で合格しただろ。後はクラスだけどＳクラスに行けたらいいなぁ。

だけど俺の考えはあまりにも浅はかすぎて、クラス決めで異例のＳクラスに１１人目ができたことになり、しかも見たことのない魔法の発動方法だった為、教師陣に目をつけられることになった。それシン以外だったら俺しかいないじゃん、マジかよ。

其の七　俺、力を示してみたってばよ！

やっほー、俺だよ、俺俺。あの二次元に転生してさらに転生した希少種転生者ことマルト＝リグ・ヴェーダだよ。

あの試験はとりあえず終わりになって結果が来るまでの数日間はそれまでと変わらず鍛練と魔法の勉強をしていて、今回は俺とか主人公のシンの評価で教師陣は禿げそうになってるんだろうな、なんてことを考えていたら、試験の結果が発表される日になった。

「えっと・・・あった、合格」

人のいないうちに合格者に自分の番号を見つけた俺は、こういう場所でよくやる顔見知り探しをした。その時、後ろからざわつく感じがして、見るとシンと一人の金髪少年、この国の王族である【アウグスト＝フォン＝アールスハイド】が肩を並べて歩いているのが見えた。

国のトップの息子と誰ともわからない少年が一緒にいるのが気になるのか、野次馬のヒソヒソ話が後を絶たない。ま、俺はそんなの関係ないけどな。

「おーいシン！」

「マルト！　お前も合格してたのか」

「おお、勿論だぜ」

周りの視線をガン無視してごくごく気軽に声をかけて近づいた俺は、シンと握手をして合格の喜びを分かち合った。

「あ、【オーグ】、紹介するよ。こいつがマルト」

「マルトと言うのは、さっき話していた彼か」

「そうだよ。マルト、こいつが」

「おいおい、流石に俺でも知ってるぞ。

マルト＝リグ・ヴェーダと申します。お会いできて光栄です、アウグスト殿下」

シンの紹介を遮って恭しく敬語と敬礼をする。さすがにお前より数か月早くこの国にいるんだ、重要人物くらいはすでに確認済みなんだよ。

「確かに私はアウグストだが、それはよしてくれ。完全実力主義のこ

の学園に身分の上下は関係ないんだからな。そうだな、さっきの彼(シン)みたいにオーグと呼んでくれて構わん」
「あ、そうか？　いやー敬語大丈夫かなって緊張してたんだよ。なら俺のこともマールって呼んでくれ、お前と同じニックネームみたいなもんだ」
「なら遠慮なく呼ばせてもらうぞ、マール」
「こっちこそよろしくな、オーグ！」
　互いに手を出して固い握手をした俺達は、学園の職員から制服を受け取って帰っていく二人を見送った後、俺も家に帰った。
　先に聞いてたけど、今夜は俺の合格祝いに父さんと母さんも招待してのパーティーだ。俺も、両親に久々に会えるのは楽しみだな。

～～～少年　移動中～～～

「ただいまー」
「あ、お帰りなさいお兄様！」
「おーリリィ、準備中か？」
「はい！　あ、でもお兄様は出てきてはダメですからね!?」
「わかってるわかってる。今日はおとなしく待ってるから」
　手伝おうと思ったけど、先にクギを刺されてしまった。早く帰ってきたのが裏目に出たな。
「じゃあクロノさんがどこにいるのか知らないか？」
　暇を持て余した俺はとりあえず合格したことを知らせようとリリィにクロノさんの居場所を聞き出してからそこに向かう。運よくクロノさんがいたから話しかけて合格したことを教えた。
「合格おめでとう、マルト君」
「ありがとうございます」
「君が合格したことを知れば、バルドもきっと喜ぶよ。ところで、クラスはどこになったんだい？」
「Ｓクラスでした。ただ人数の関係上、学園の席はＡクラスに置かれるとか」

「Ｓクラスなのに Ａクラス？」
　クロノさんは俺の言葉に首を傾げていたけど、その反応もわからなくもない。Ｓクラスは学園の最上級クラスで、試験の総合成績のトップ１０しか入れない決まりとなっている。
　しかし、俺の成績は惜しくも１１番目で、それまでの歴史上クラスの初回編成で人数を変更したことがない学園が急遽俺もＳクラスに入れようとしている。これが良く分らないんだ。
「まあでもこれまでのマルト君の魔法を見てたらそれも妥当だよね」
「いやあ、これでも我流なんであんまり自信は無いんですけど」
「いや、君と同い年の中でも無詠唱できるのって少ないからね、それだけでも評価が高くなるよ」
　確かに、他の奴らは魔法を使うのに詠唱してたな。詠唱って、憧れるけど魔法ごとにいちいち内容を決めるのはバカバカしいと思って止めた記憶がある。忍術も心（地の文）で名前唱えるようにしてるし。
「それで、今日はもう外には出ないのかい？」
「はい、後は学院に行く準備とか制服の試着をしようかと思ってます」
「そっか、じゃあ後で僕の部屋に来るといい。この前のチェスの続きでもしよう」
「分りました。それじゃあまた後で」
　そこからしばらくして、父さんたちが到着して２家族合同パーティーをした。合格祝いに皆からいろんなプレゼントを貰って、一部がとんでもない代物だったのは別の機会に話すとしよう。ここで話すと文字数（お）が膨大（メタ）になるからネ（いい）、仕方（タ）ないネ（いい）！
　さて時間は過ぎて翌朝、着替えを済ませた俺を見送る皆と話をしていた。
「素敵ですわ、お兄様」

「サンキューな、リリィ」
「この制服懐かしい！　もう何十年も前から変わってないわね♪」
「デザインは変わってないが魔道具としての質は上がっているな、〝衝撃緩和〟は俺たちの時は無かったはずだ」
「制服に適用している素材と付与はうちが担当しているから、もしその服でやりたいことがあったら先に伝えてくれるだけでいいからね」
「やりたいことって言えば、もう少し物を入れるポケットとか作ってくれませんか？　内側に織り込めば見た目は対して変わらないですし」
「それなら今日帰ってからドロシーさんにやってもらいましょう。ね、ドロシーさん？」
「承知いたしました、クララ様」
　そんなことで、見送られた俺は先に教室に忍び込ませた分身がつけたマーキングに【飛雷針の術】でワープする。原作の【ゲート】よりこっちのほうが強そうじゃね？まあマーキングが必要だからあんまり変わらないか。
「さて、まだ入学式の時間までは早いし、学院内を見て回るか」
「と、う、ちゃ、く～～～～！　ってアレ、もう人がいる!?」
　教室の入り口から聞こえた声に目を向けると見た目小学生の俺と同じ制服を着た女の子の姿が。第一声からの印象は〝ロリ修造〟というワードだった。
「朝から元気だな」
「えへへ、だって憧れの学院に入学するんだよ！　興奮して昨日あんまり寝付けなかったんだもん！」
「ああ、それで寝癖が残ってるのか。良かったら直そうか？　身嗜みする分の道具は持ってるぞ」
「おお、じゃあお願い！　あ、あたし【アリス＝コーナー】だよ！」
「俺はマルト＝リグ・ヴェーダだ。よろしくな」
　そっからコーナーの髪を整えたり、その時にドライヤー代わりに使った【沸遁（ふっとん）】の説明をはぐらかしたりしてると、あっという間に入学式の時間になっていた。

入学式はまあ、ほとんど原作と同じ流れに俺と俺の家族がいたくらいだったとしか言う事もなかったな。
「おいマルト、さっきマリアから聞いたけどあいつらが貴族だって先に知ってて何で教えてくれなかったんだよ」
「聞かれなかったからな、というかあの英雄の孫だってことを隠してたお前(シン)に言われたくねーな」
「ぐうの音もでないとはこういうことか・・・」
「まあそのおかげでこっちは大変面白、もとい有意義な時間になったから元気出せ」
「お前とオーグは絶対面白がってたろ!」
だって山に引き籠ってて常識が無い奴とか恰好のイジり対象でしかないし。
お前から常識知らずが無くなったら普通の主人公だからな、少し凡骨なくらいが(キャラが立って)バランスがいいんだよ。
そして式の後は各教室へ担当の先生の案内で入っていく。Sクラスの皆には先生から今回の特例を話してもらった。それでも態度が変わらないあたりコイツらいい奴過ぎるだろ。
んで、どっかの坊ちゃんが騒いでシシリーのシンに対する株が爆上がっているのをオーグとニヨニヨしながら見てから、入学初日は過ぎて行った。
帰ってからはドロシーに制服のプチ改造をしてもらって千本を収納するスペースを作ってもらった。クナイだとデカすぎるため仕方なく千本用のにしてもらった。ちくせう。
「で、お前らはまたシンのとんでもないスキルを見てきたと。付与魔法の書き替えか・・・俺の母さんが知ったら跳びあがるな」
「しかも付与後の性能はもはや国宝級だということも、アイツは聞かされるまで自覚がなかった始末だ」
「常識外れも行き過ぎて、何があっても驚かないぞ俺」
訓練場で授業を受けてた俺はオーグに昨日あったことを聞いていた。
科学世界の人間は中世レベルの剣と魔法の世界に転生するとシン

みたいな奴になるのだろうか。
「それにしても、やっぱ入試上位陣は魔法の質から違うな」
「お前も入試では結構なことをしていたのではなかったか？」
「周りから小馬鹿にされてたからつい本気を出しただけで、普段はもう少し抑えてるよ」
「次、ウォルフォード！　最後はリグ・ヴェーダだ」
「あ、ついに呼ばれたか」
「さて、特例のお手並みを拝見させてもらおうか」
「お、言ったな？」
　オーグの隣から移動して軽く腕の関節を揉み解す。今回やるのはＮＡＲＵＴＯ次元で難易度Ａランク越えのものだから扱いに注意が必要なんだよな。でも期待されてるんだし、まあ多少はやってもいいよね？
　さて、始めようか、【仙術・妙木山モード】！
「あれ、リグ・ヴェーダ君の魔力が変わった？」
　魔力を見るのが得意な奴はすぐに気付いたな。
　右手を上げてそこに魔力を集中、ある性質へ変化させる。
「何だか、凄いことになってないアレ？」
「おいシン、ちょうどいい機会だ。その制服の性能試験に前に出て我々を守れ」
「お前ここぞという時に俺を生贄にすんなよ!?」
　後ろが何かやかましいけど無視。魔力を圧縮、高速回転させて余剰分を手裏剣の形に変えて周囲に滞空させる。
「準備完了！」
「っ!?　全員伏せろ!!」
【仙法・溶遁螺旋手裏剣】!!
　投げつけた螺旋手裏剣は的に触れた瞬間、的を蒸発させ、試験場に真っ黒な球形のクレーターを作っていた。幸い後ろには被害がなかったけど、クラスメートからの驚きとオーグの「ああ、こいつも同類だったか」という視線に思わずこう言うしかなかった。
「なんか、俺やらかしたか？」

そして案の定シン、シシリー、マリア、オーグから説教をされました。確かにやり過ぎたと思ったが、お前にだけは言われたくないぞシン！

其の八　俺、色々聞くってばよ！

皆！久しぶりだな。マルトだぜ。
俺の熔遁螺旋手裏剣で酷い有様になった教室を忍術で直していたところだ。
木遁と風遁で木材を切り出し、床に填め込む。表面を火遁で炙り、塵遁で削って溶遁の薄いゴム膜でコーティングして終わりっと。あと魔法の暴走対策で防壁を張らないといけないだろうが、そこは先生にぶん投げよう♪
「で、あれは一体なんだ」
「え、なんだよオーグ」
「先程からのお前の魔法だ、あれが普通じゃないことはわかるだろ」
「え、俺は普通なことだと思ってるけど」
「は…？」
「ん？」
『え？』
修理が終わったタイミングで、オーグの質問に答えたら他の全員から驚かれた。
「普通の魔法で木を生やすことはできないぞ」
「俺はできるぞ？」
「…さっき説明はされたが、普通の魔法で溶岩は作れないぞ」
「俺はできるぞ？」
「本当に人間か、お前？」
「何を言ってるんだお前は、俺は人間だ」
『いやそれは無い』
「さっきから酷くねえか!?」
こんなの村での仕事でやりなれてるし、村の皆だって当たり前のことみたいな反応してたんだが!?
「魔力で大工仕事してるの、初めて見たかもぉ」
「あんな魔力の使い方、私は無理」

「はぁー…シンが私達の知ってる攻撃魔法の考えをぶっ壊したなら、マルトは魔法の使い方をぶっ壊してるわね」
「加えてあれだけの大魔法を使ったにもかかわらず疲れた様子もないでござる」
「どうやらマルト君は魔力の制御が僕等の中でも特別上手なんだろうね」
「見ろ、あれが普通の反応だ」
「えぇ…」
　クラスメイトの反応を見せられた俺は、大袈裟すぎないかと困惑した。
　確かに原作だと戦闘シーンくらいしか魔法は出てなかったし俺の存在が異常なのは認めるが、そんなに驚くことかよ。
　そう考えると他の二次創作の転生者が思う常識って転生先次第じゃ異端なんだろうな。しかし、コイツらの反応を見る限り、俺の忍術は全く分からないみたいだな。
（忍術を知らないって、俺が前世でやったことって…）
「流石、学院から推薦されたのは伊達じゃないわけだな」
「ん？　学院からってどういうことだよシン？」
「いや、そうだってオーグが」
「はぁ…おいシン、不用意に情報を喋るな」
　ちょっと絶望タイムを感じていた時、シンは俺が知らない情報を言っていた。それを指摘されて悪い悪いとシンが謝っているのを横目に、オーグが渋々詳細を話す。
　かいつまむと、俺とランキング１０位だった【ユリウス＝フォン＝リッテンハイム】の成績の差がたったの１点で、普通なら俺はＡクラスに行く予定だったんだけど、試験の担当していた教員が俺の忍術の印がこれまでの生徒とは違いオリジナリティがあると報告があって、その異色の魔法の発動方法について興味があり、詳しく調べられるよう少人数で作られるＳクラスに置いて調査するというのが俺がＳクラス入りした理由らしい。
「どうせだ、マールもここで説明しろ」

「説明しろって別に言う必要なくないか？　俺が印、こうやって手で形を作るのも無詠唱みたいなもんだろ？」
　我流だから変な癖がついてんだよと言いながら12種の印を見せるとほぼ全員が物珍しそうにしていたけど、シンとオーグとマーカス先生の3人が目を鋭くさせた。
「なあマール、それもう一回やってみてくれよ」
「別にいいぞ、ホイ」
　シンに言われてもう一回印を組んで見せると3人は真剣な表情をしていた。
「なあ、どうしたんだよシン？　珍しく真剣に見るな」
「…マール、お前【魔技（まぎ）】って分かるか？」
「まぎ？」
　あれ、何か思ってたのと違う質問が来たな。それでも俺はシンの質問に分からないフリをする。
「小さい時にじいちゃんに聞いたんだよ。魔法が作られる前にあった魔法みたいな力って」
「シン君のお祖父様…賢者様がですか!?」
「ああ、でもじいちゃんが俺達くらいの時の噂話だから事実かもわからないとも言っててさ、その時に見せてもらったのとマールの手の形が似ていたんだよ」
　そう言ってシンがやってみせたのは両肘を肩まで上げて手の指を交互に組む「巳」の印だった。それは確かに俺が見せたけど、俺が前世で広めたのは【忍術】の筈だぞ？
「オーグと先生も知ってるのか？」
「俺は歴史関係の研究会の発表で魔法の発祥という説を出していたのを思い出してな」
「私もだ。それと、我が家の書庫にマールが見せた手の形の一部が記された書物があったのを覚えている」
「マジか」
　3人の話をまとめると、今より数百年前の世界に【魔技】なるものがあって、それが体系を変えたのが今の魔法ってことか。あれ、こ

れって六道仙人（大筒木ハゴロモ）っぽくね？
（そっか～、俺が広めた忍術（魔技）が今の魔法になったってことか～）
なんて心中ニヤけているとシン達からこんな提案された。
「マルト、良かったら俺のじいちゃんに会ってみないか？」
「え、マーリン様にか!?」
「少なくともここにいる面子ではお前の魔法のことを詳しく解らないだろう。なら、より魔法の専門家に会うのが最適だ。私も父に相談してその書物を持って来よう」
「あ、俺は悪いが辞退するぞ。魔技は研究以上のことは分からないからな…あと、一教師の分際で賢者様に会うのは胃にクるものがあってな…」
「そ、そうですか。マールはどうだ？」
「そりゃもうオッケーだぜ！　あ、でも先に家に連絡を入れてからいいか？」
「話は決まりだな、授業の後はシンの家に集合するぞ。他に来る奴はいるか？」
それからシンの家に行くメンバーが決まった後、俺達は全員一緒に飯を食いに行った。そこでシンの魔物狩りの経験談を聞かされたことくらいで、他は特に話もなく昼飯を食べ終わった俺達は次に見に行く教室を目指し移動する。
「研究会って色々種類があるんだな」
魔法や魔道具全般のものからその中から特定の種類のものを取り上げたものまで、それ以外にも文化系の研究会もあって本当に多種多様だった。もちろん、救国の英雄であるマーリン様やメリダ様の研究会、一種のファンクラブ的な物もあった。
「まあ、研究会っていうよりも好きな人が集まってやる活動って感じだし、先生たちも結構適当なとこがあるのよね」
「それでも、定期的な発表会でアピールしないと解散させられることもある」
「ん～でもぉ、私達は大丈夫だと思うけどなぁ～？」
「そうだよ！　何せこっちには賢者様のお孫さんと古代の魔法使いが

いるんだから！」
「ははは…」
結局、俺のことは様子見ということで話は終わったけど謎の魔法を使う俺はシンと一緒のビックリ人間認定されてしまい、最終的にＳクラス研究会のテーマに起用されることとなった。本当ならここはシンだけのはずなのに、どうしてこうなった⁉
偶然重なった俺とシンの苦笑いが宙に漂った後、それはやってきた。
ゾクゥッ!!
「っ」
「この魔力は⁉」
「どうしましたか、シンくん？」
「マルト？」
（そうだよ、原作はこの後、アイツが来るんだった！）
油断していたことに気づいて後悔しても、事態は進む。
学院から外に続く道から感じ取った気配が近づいてくる。俺とシンが警戒状態をとったのにつられた皆もそっちに目を向けた。
「あれは、【カート】か…？」
「…違う」
「マルト…？」
少し前にシシリーをストーキングしていた事と階級を使った強迫行為で自宅で謹慎状態の筈だった【カート・フォン・リッツバーグ】の姿をしているが、あれは前までのあいつじゃねえ。
（さて、周りにはオーグ以外にも一般の生徒もいる。下手に忍術を使えないし、どうやって、手を抜くかな…？）